

民草の誠の末も、大神知ろし召せなどゝも奏させ給ふのであらうか、きのふ賜はりし大詔の上からも畏けれどかゝることまで思い浮べて僭上の沙汰ながらひそかに主上の御感懷をしのび奉つた。御拜十餘分で御簾の外に立ち出でさせられ更に正面して拜一拜、再び前行後従の供奉に、南廂を東廂にと玉歩を運ばせられ、北の御殿にと入御あらせられた。

入御の後、春興殿上闈として人無きこと數分時、四時半過ぎまた與へられる相圖に起立すると、聖上陛下出御の時と同じ東廂を黒袍の宮官の前行につゞいて、皇后陛下が御裳を女官に捧げさせられしづくと出御し給ふ。おすべらかしの御髪、五衣の御装ひなど、一々書きつくるには悲しくも有職に通ぜず、或は誤らんことを恐れ、また世間委しく記せるものあるのに譲つて、たゞ氣高くも薦たけきことの女神の如くましませるを拜したとのみ傳へたい。供奉に従ひ給へる各妃殿下と、夕日微かにさし添ふ高殿の上を、それぐに漆の御髪長く後ろに垂れさせ、檜扇を御手に、とりぐの色打ちかさねし御衣の裾長く引かせられ、御裾さばき鮮かに、二間置き位の隔たりにて練らせ給ふ御有様、繪ならでは寫し難い。こたびは供奉の各妃殿下も、殿内の東側に坐し給うたとおぼしく、自分の位置からは御姿を拜する由もなかつた。かくて御拜了つて出御せられ、もとの廂を北にと入御せられたのは四時四十五分の頃と記憶する。

兩陛下を初め奉り、各宮殿下の御拜を了らせられた後、諸員一齊に拜禮し、續いて神饌は撤せられて、こゝに御